

コラボえどがわ総会報告 - 2019年度活動報告 -

第8回通常総会を終えて

令和2年6月5日に総会を無事開催することができました。令和元年度は、法人の三事業共に順調に収益を上げ、法人始まって以来初の全事業黒字化を実現しました。そして、令和2年度は新たに5名が加わり、ワーク8名、ナース18名、ハート8名、事務局1名、合計35名の人員体制となりました。この度の新型コロナウイルス感染防止対策として「With CORONA(コロナと共に)」を意識した働き方やサービス提供の在り方を追求して工夫を重ねてきました。利用者の方に安心と満足を届けられるよう定期的に事業を見直し進めています。これからも事業が継続できるよう努力を続けてまいります。さらに、地域のニーズにお応えしながら、信頼される医療・福祉サービスを提供し、お一人お一人の健康と幸せに貢献できるよう精進してまいります。

理事長 鶴岡 恵子

あーと花きりん 利用者作品紹介

詩の投稿

耳を澄ませ 聞こえない時
はなおさら 明日聴こえるかもしれない
音を聞き逃さないように
目をみはれ 曇っている
きはなおさら 曇っている
いつかやってくる曙光の
兆しを見つけてくれるように
胸を張れ 心破れたときは
やがて波がとどろくように
夢は戻ってくるかもしれない
いから
心を開け 孤独の底の時は
なおさら 嫌だとしても世界
はいつも そこにたたずんでいるから
生きろ 死にたいときは
なおさら 散り散りの乾いた心は
どんなに捨てようとしても
できないから
そして最後に歌いだせ
心の限り 疑って見出した
果ての物を
地に頼れて立ち上がれず
何も感じられない今こそ

「ポエム」ペンネーム：かなで



空仙穹子さん制作



「コロナに負けるな」
りえちゃん制作



「手作りマスク」
切田さん制作

編集後記

新型コロナウイルス対策に奮闘している間に蒸し暑い季節となりました。見えない敵に立ち向かう事の難しさを日々実感しております。皆様はどんな対策をされましたか？良い方法がありましたらどんどん取り入れ、ウイルスに負けないようこちらにも変異して次の波に備えたいです。

発刊に際し、関係者の方には、お忙しい中ご協力をいただき、ありがとうございました。

広報委員 モロズミ



花きりん新聞

第19号
発行者：コラボえどがわ
令和2年7月発行

WITHコロナの時代

～地域の中で豊かに生き抜くために～

今年のはじめに中国で流行しているとニュースで見聞きして、どこか遠い国の出来事かと思っていた新型コロナウイルス…。その後あっという間に世界中に蔓延し、現在も猛威を振るい、被害は深刻化しています。日本でも4月16日に政府が緊急事態宣言を全国に発令、5月末に解除されたものの、



コロナで街から人が消えた...

いまだ感染者の増加は続いており、予断を許さない状況となっています。

我々コラボえどがわでは、発生当初から新型コロナウイルスの感染防止のため、様々な対策を各事業の特性に合わせて実施してきました。これは、「障がいをもつ人たちが、地域の人とつながり、安心して快適な生活ができる地域づくりに貢献していく。」というわれわれの地域福祉の理念に基づき、利用者の方一人一人の安全を確保することを最優先事項と考えたからです。

前号の防災特集に続き、今号ではコロナ対策特集号をお送りします。われわれコラボえどがわの各事業所が実施した施策の紹介と振り返りを通して、改めて読み手の方にコロナ感染対策についての知見を広げていただき、いずれ来るであろう第二波や他の災害への危機意識を高めるきっかけとしていただければ幸いです。

花きりん新聞 編集長 菊池 将

WITHコロナの時代

～ワーク花きりんの取り組み～

就労継続支援B型事業所 ワーク花きりんではご利用者と職員をコロナから守ること、そしてご利用者の生活リズムを崩さないことを重視し、施策を検討、実施してきました。

まずはご利用者の方には、在宅支援（ご自宅で就労トレーニングを行うこと）を中心に実施することにしました。生活リズム実施表や自宅でできる運動プログラムなどの課題をお渡しし、テレワークのスタッフから電話で課題の進捗を確認、週一回は通所していただき、オンライン面談を実施しました。また、どうしても在宅支援中心では不安を感じる人もいらっしゃるの、必要な方のみを対象に、通所による支援を行いました。このように在宅と通所による支援を三週間実施したところ、利用者の皆さんに変化がありました。通所がなくなることで不安な気持ちになる、生活リズムや食事が不規則になる、などは多くのご利用者から訴えがありました。通所を続けることの大切さを改めて実感する機会となったわけですが、一方でメリットもありました。



洗面所での手洗指導

在宅支援に切り替わったことをきっかけに、通所状態が良くなる方や、活動が活発になる方がでてきたのです。普段より事業所内の人数が少なく、ストレスが減ったことや、在宅でできる支援にバリエーションが出てきたことなどが要因と考えています。

現在は、いつ第二波がきても対応できるように、これまでの結果をもとに、在宅支援のコンテンツを充実させるとともに、生活リズムも整えられるよう安全に通所できる環境を確保するなど、対応力を強化することに取り組んでいます。

ワーク花きりん所長 鶴岡 正明

■WITHコロナの時代

～ナース花きりんの取り組み～

訪問看護の現場では、どのような取り組みが行なわれていたのでしょうか？
ナース花きりん市川統括所長にインタビューしてみました。
★5月末までの緊急事態宣言下ではどんな対策を実施しましたか？

(市川)「とにかく感染対策はしっかり行った上で、サービスを提供していくことを心掛けましたね。その際の判断軸は常にご利用者と職員を守ることでした。具体的には、コロナ対策を実施した上での訪問になることと、ご利用者にも協力をお願いすることになることなどを盛り込んだ説明文を持って、全ご利用者への訪問を行いました。丁寧に説明し、理解を求めたところ、多くのご利用者が協力的に対応してくださいました。コロナ対策備品の整備や体調チェックリスト、感染リスクの高いご利用者（発熱ありや濃厚接触者）宅を訪問する際には、対策備品一式を持参するなど、出来る限りのことは実施できたと思います。

通所や訪問介護など多くの福祉サービスが休止となり、不安に思っているご利用者にとって、訪問看護は貴重な人とのつながりです。サービス継続を希望する声を数多くいただきました。私たちとしても、医療サービスは最後の砦なので、サービスが途切れる怖さを理解し、サービスの継続を重視しました。

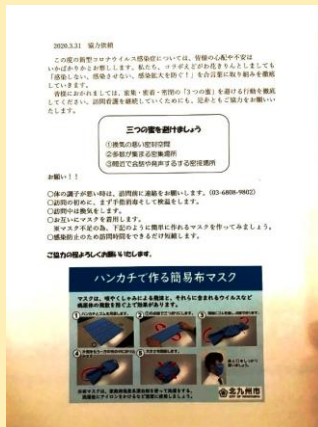
人が2人やっと入るスペースでのサービス提供も少なくない中、感染リスクを負いながらも、サービスを途切れさせることなく実施した職員は、本当によく頑張ったと思います。」



訪問時に持参するコロナ対策備品



入口の様子



協力依頼のお手紙

★緊急事態宣言が解除された後に心掛けていることを教えてください。

(市川)「緊急事態宣言の期間中は、職員の安全確保のために、やるべきことをやったら退勤としていました。そのおかげで、以前より訪問の時間配分や業務の効率化などを考える職員が増えたように感じます。

私たちは訪問看護という専門職なので、サービスの質を確保しつつ、効率化や時間短縮も考えていこう、プライドを持って仕事にあたろう、ということに特に心掛けていました。以下の声掛けをスタッフみんなで励行しました。

- ①訪問看護はご利用者に見られているということを忘れないこと。
- ②ご利用者は周囲に発信できることを忘れないこと。
- ③訪問看護は時間のやりくりを医療のプロとしての自覚をもって行うこと。」

★コロナウイルス第二波、第三波が来た場合はどうでしょう？

(市川)「第一波をうまく乗り越えられたことで、自信になりました。次もきっと対応できると思います。」

インタビューー 鶴岡 正明

小嶋：結局さっきお話しした、「みんなで作業をやっている！」という一体感を大事にしたかったからなんですよ。やはり、在宅活動の利用者さんとやりとりしていて、「早くいつものお風呂掃除をやりたい。」という声が本当に多かったんですね。また、家の中での切り絵製作では、集中力や情熱は維持できないな、というのもしました。なので、なるべく早くみんなにお風呂掃除作業に戻ってもらう、というのを大事にしたんです。

「業務の効率化や工賃アップを日ごろから考え抜いていたことが早期対策に結びつく」

菊池：お風呂作業にみんなが復帰してもらうために、どんなことに注意したんですか？

小嶋：まだ緊急事態宣言が出ている時期だったのもあり、衛生面と事業所内、通勤途中での距離を保つことには特に注意を払いました。衛生面では、手洗い、マスク、消毒などの防護徹底の強化をしました。事業所内や通勤途中で距離を保つために、利用者さんの作業開始を8時半と10時の2組に分け、また、スタッフの勤務時間も7時半から15時半にシフトしました。今も続けていますよ。あと、うちの事業所はみんな席は決まっていなくて、それぞれ、距離をとって、密にならないように働いています。



お風呂掃除の業務風景

菊池：フリーアドレス（座席の自由化）も導入！ よくこんな短期間でいろいろ対策が打てましたね。

小嶋：ええ。というのも、特にコロナのためにとった対策というわけではないものも多く含まれていたからなんです。もともとお風呂の掃除ということで、感染症や衛生面は注意していましたから、そこをより強化という形をとれば良かったですし、先ほどお話しした事業所内のフリーアドレスも、「より効率化が図れて、工賃をアップさせるための仕組み」というのを考えていて行きつき、導入済だったものなんです。それが丁度コロナ対策にも役立つことになりました。

鶴岡：通常のお風呂掃除の業務を再開させることに、スタッフや利用者さんからは、反対の声や疑問などはなかったのでしょうか？

小嶋：利用者さんからは、みなさん「早くお風呂掃除をやりたい」という声ばかりでした。そして、スタッフからも反対の声はほとんどなかったです。というのも、うちでは先ほど話した「お風呂掃除で得られる一体感」を大事にしているの、それを実現するために、課題となることは、事前に徹底して考え抜いておいたんですね。ええ。どうやってみんなを安全に保つかという部分です。なので、どんな手段で安全を確保するかを説明したら、みんな賛成してくれました。超朝型の勤務時間も、16時すぎには家に帰って、まったりでき、プライベートも楽しめるので好評ですよ（笑）。

「コロナで分かったこと。安全対策と収益を両立できる事業所が選ばれる時代に」

菊池：なるほど。ありがとうございます。では、次に第二波が来たら、どのような対策を講じますか？

小嶋：基本は、今回やったのと同じですね。周りの情報と過密度には注意をして、それを避けるために防護と安全の確保を徹底する、あわせて効率化を実現する、ということだと思います。

鶴岡：最後ですが、コロナが来てこれから1年後、福祉サービスはどうなっていくと思いますか？



小嶋：もうコロナ前と同じようには戻らないと思います。ということは、以前と同じようなやり方では、存続は厳しいと思っています。コロナ対策を行いながら、収益アップや効率化を図っていけるところと、そうでないところとの格差が大きくなると思います。例えば、事業所内の内職作業でも過密を避けて、工賃も維持・アップできるところや、在宅専門の支援でも利用者さんのモチベーションを維持しながら、社会に価値を提供しつつ、工賃も十分に還元できるところ、そんな事業所が選ばれ、残っていく時代というのが来ているのではないのでしょうか。